

名前 () 日づけ (/) できた数 (/28)

使い方 本文を声に出して読んでから、傍線の番号を手がかりに解きます。**この場面の山は敬語（誰から誰への敬意か）と口語訳**です。とくに「せ給ふ・させ給ふ」の二重敬語と、丁寧語「さぶらふ」を落とさないこと。

あらすじ 壇ノ浦の合戦の最後。源氏の兵が平家の船に乗り移り、船を動かす水手・梶取も討たれる。安德天皇の祖母・二位殿（平時子）は、かねての覚悟どおり神璽と宝剑を身につけ、八歳の天皇を抱いて船端へ歩み出る。「どこへ連れて行くの」と問う幼帝に、二位殿は、前世の善い行いの力で天子に生まれたが運が尽きたと説き、東の伊勢大神宮にお別れを、西に向かって念仏をと諭す。天皇が小さな手を合わせて念仏を唱えると、二位殿は「浪の下にも都のさぶらふぞ」と慰めて、ともに海の底へ身を投げた。

一次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

源氏の兵ども、すでに平家の船に乗り移りければ、水手（かこ）・梶取（かんどり）ども、射殺され、斬り殺されて、船を直すに及ばず、船底に倒れ伏しにけり。

二位殿はこの有様を①御覧じて、②日ごろ思しめしうけたる事なれば、鈍色（にぶいろ）の二つ衣（ぎぬ）うち被（かづ）き、練袴（ねりばかま）の稜（そば）高くはさみ、③神璽（しんじ）を脇にはさみ、宝剑を腰にさし、④主上（しゆしやう）を抱き奉りて、「我が身は女なりとも、⑤敵（かたき）の手にはかかるまじ。君の御供に参るなり。御心ざし思ひ参らせ給はむ人々は、急ぎ続き給へ」とて、船端（ふなばた）へ歩み出でられけり。

主上、今年は八歳にならせ給へども、御年のほどより、はるかに⑥ねびさせ給ひて、御かたちうつくしく、あたりも照り輝くばかりなり。御髪（みぐし）黒うゆらゆらとして、御背（おんせ）過ぎさせ給へり。あきれたる御様にて、「⑦尼（に）ぜ、⑧われをばいづちへ具して行かむとするぞ」と仰せければ、

二位殿、幼き君に向かひ奉り、涙をおさへて申されけるは、「君はいまだ知らしめされさぶらはずや。先世（せんぜ）の⑨善戒行（じふぜんかいぎやう）の御力（ごりき）によつて、今⑩万乗（ばんじやう）の主（あるじ）とは生まれさせ給へども、悪縁（あくえん）にかれて、⑪御運（ごうん）すでに尽きさせ給ひぬ。まづ東に向かはせ給ひて、伊勢大神宮に御暇（おんいとま）申させ給ひ、その後、西に向かはせ給ひて、西方浄土の来迎にあづからむと思しめし、御念仏（ごねんぶつ）さぶらふべし。この国は⑫粟散辺地（もくさんへんぢ）とて、心憂きさかひにてさぶらへば、極楽浄土とてめでたき所へ⑬具し参らせさぶらふぞ」と、泣く泣く申させ給ひければ、山鳩色（やまばといろ）の御衣（おんぎ）に、びんづら結はせ給ひて、御涙におぼれ、小さくうつくしき御手を合はせ、まづ東を伏し拝み、伊勢大神宮に御暇申させ給ひ、その後、西に向かはせ給ひて、御念仏ありしかば、二位殿やがて抱き奉りて、

「⑭浪の下にも都のさぶらふぞ」と慰め奉りて、⑮千尋（ちひろ）の底へぞ入り給ふ。

語注 水手＝梶取＝船をこぐ者と、かじをとる者。二位殿＝平時子（たいいらのときこ）。清盛の妻で、安德天皇の祖母。従二位だったので「二位の尼」とも呼ばれる。鈍色＝にぶい灰色。二つ衣＝二枚重ねの衣。練袴＝練絹で仕立てた袴。稜＝袴のすそ・へり。主上＝天皇。ここでは八歳の安德天皇。君＝天皇。ここでは安德天皇。御心ざし＝思ひ参らせ給はむ人々＝私を慕ってくださる人々。御背過ぎさせ給へり＝（御髪が）背の下まで届いていらつしやう。あきれたる＝あつてにたれた。先世＝前世。生れる前の世。十善戒行＝十の善い戒めを守り行ふこと。悪縁＝悪い巡り合わせ。御暇申す＝お別れを申し上げる。来迎＝臨終のとき、阿弥陀仏が極楽浄土から迎えに来ること。心憂きさかひ＝つらい世界。山鳩色＝黄色みをおびた緑色。天皇の御衣に用いる色。びんづら＝少年の髪のかき方。左右に分けて耳のあたりで結ぶ。※本文の「浪」を「波」と書く教科書もある。

A 語句の意味と読み (1～7)

- (1) ①「御覧じて」の終止形(言い切りの形)と意味を書け。
- (2) ②「日ごろ思しめしうけたる」の「日ごろ」の意味を書け。
- (3) ③「ねびさせ給ひて」の「ねび」は、もとはどの語か。終止形と意味を書け。
- (4) ④「尼ぜ」とは、どういう意味の言葉か。
- (5) ⑤「の「いづち」の意味を書け。
- (6) ⑥「万乗(ばんじょう)の主(あるじ)」の意味を書け。
- (7) ⑦「千尋(ちひろ)」の意味を書け。

B 文法 (8～13)

- (8) ⑧「主上を抱き奉りて」の「奉り」は本動詞か補助動詞か。また、敬語の種類を書け。
- (9) ⑨「敵の手にはかかるまじ」の「まじ」の意味を書け。
- (10) ⑩「ねびさせ給ひて」の「させ給ひ」を文法的に説明し、この敬語の呼び名も書け。
- (11) ⑪「具して行かむとするぞ」の「む」の意味を書け。
- (12) ⑫「御運すでに尽きさせ給ひぬ」の「ぬ」を文法的に説明せよ。
- (13) ⑬「千尋の底へぞ入り給ふ」に見られる文法上のきまりの名と、結びの語を書け。

C 指す内容・敬意の方向 (14～17)

(14) ④ 「主上を抱き奉りて」の「奉り」は、誰から誰への敬意か。

(15) ⑧ 「われをばいづちへ具して行かむとするぞ」の「われ」は誰を指すか。

(16) ⑬ 「具し参らせさぶらふぞ」の「参らせ」は、誰から誰への敬意か。

(17) ⑮ 「千尋の底へぞ入り給ふ」の主語は誰か。

D 口語訳 (18～21)

(18) ② 「日ごろ思しめしうけたる」を口語訳せよ。

(19) ⑤ 「敵の手にはかかるまじ」を口語訳せよ。

(20) ⑧ 「われをばいづちへ具して行かむとするぞ」を口語訳せよ。

(21) ⑭ 「浪の下にも都のさぶらふぞ」を口語訳せよ。

E 内容・記述 (22～25)

(22) ② 「日ごろ思しめしもうけたる」とあるが、二位殿は何を覚悟していたのか。三十字以内で書け。

(23) ⑨ 「十善戒行の御力」とあるが、二位殿は安徳天皇が天皇として生まれたわけをどう説明しているか。四十字以内で書け。

(24) ⑪ 「御運すでに尽きさせ給ひぬ」に続けて、二位殿は安徳天皇に何をしよう勧めているか。東と西に分けて、五十字以内で書け。

(25) ⑭ 「浪の下にも都のさぶらふぞ」と二位殿が言ったのはなぜか。四十字以内で書け。

F 文学史・思想 (26～28)

(26) ③ 「神璽(しんじ)」とは何か。また、それをふくむ三種の神器の名をすべて書け。

(27) ⑫ 「粟散辺地(ぞくさんへんぢ)」とはどういう意味か。また、どこの国を指しているか。

(28) この場面がおさめられている作品の書名・成立した時代・種類(ジャンル)を書け。

【テスト直前チェック】この三つ ①「せ給ふ・させ給ふ」は二重敬語(最高敬語)で、安徳天皇の動作に集中する。地の文の「ならせ給へ」「ねびさせ給ひて」は作者から天皇への敬意。二位殿の会話中の「生まれさせ給へ」「尽きさせ給ひぬ」は、話し手である二位殿から天皇への敬意。二重敬語かどうかと、誰からの敬意かは別に考える。②「さぶらふ」は丁寧語で「ございます」。⑭の訳はここが決め手＝「波の下にも都がございますよ」。二位殿から、聞き手である安徳天皇への敬意。「お仕えする」と訳すと×。③東＝伊勢大神宮にお別れ(御暇)、西＝念仏(西方極楽浄土)。向きと行いの組み合わせと順番が、記述問題の答えになる。